

近田亮平 編

『躍動するブラジル—新しい変容と挑戦—』

アジ研選書No.三四



た。

ブラジルがBRICsの一角に挙げられた二〇一一年当時、「なぜブラジルが選ばれるのか？」という声も多くあった。一九八〇年代の

ブラジルのリオデジャネイロが南米初となるオリンピックの開催地に選ばれた二〇〇九年、イギリスの有力誌『The Economist』は、リオデジャネイロのキリスト像がロケットのように飛び立つ場面をイメージした表紙とともに、「離陸するブラジル」と題する特集記事を掲載した。この特集は、BRICs(二〇一一年から南アフリカが加わりBRICSとなっている)のなかで、当初強かった懐疑的な見方を覆し発展している「新しいブラジル」を過小評価すべきではないと論じた。他のBRICs諸国と比べブラジルには、中国にない政治の民主主義があり、インドのような宗教・民族の対立や隣国との紛争がなく、ロシアと異なり輸出が石油や武器ばかりでなく外国人投資家を尊重すると評価した。そして、政府の役割のあり方、教育やインフラの遅れ、治安問題、「自信過剰」(hubris)などの懸念材料はあるが、ブラジルは自らの進路へ向かい「離陸」したと結論づけ

「失われた一〇年」やハイパー・インフレといった負の記憶が根強く、一九七〇年前後の「ブラジル経済の奇跡」を知らない世代も増え、地理的にも遠い日本ではとくに、このような見方が大半だった。しかし、一九四一年にツヴァイク(Stefan Zweig)に『未来の国』と著されたブラジルは、幾重もの紆余曲折を経た後の二一世紀初め、その未来がようやく到来したと評されるまでに変貌を遂げた。そして、新興国の雄としてわれわれの前に台頭したブラジルを、さまざまな分野から総合的に分析し、国家として変容を遂げた「新しいブラジル」としてとらえる研究が海外で発表された。

しかし日本ではブラジル研究の層が薄いこともあり、国内外で高まるブラジルへの関心に応えるような研究はで

く僅かだった。そこで日本のブラジル研究をリードしてきたアジア経済研究所として、二〇一二年度に『新しいブラジル』と題する研究会を組織し、社会科学系のブラジル専門家に協力いただき、近年のブラジルを総合的に理解すべく研究や議論を重ねた。本書はその成果をまとめ、学生や一般読者向けの啓蒙書として出版したものである。また本書は、ジェトロ・アジア経済研究所が二〇一三年一月に世界銀行や朝日新聞社と開催した国際シンポジウム『成長と公正を求めて—ブラジルの経験を中心に』のベースにもなった。

ただし同研究会が終了したのち、ブラジルで大きな状況の変化が突如発生した。それは二〇一三年六月に勃発した抗議デモであり、全国規模の運動としてはブラジルで約二〇年ぶりのものであった。この予期していなかった情勢の急変をできるかぎり取り入れるべく、本書ではタイトルの変更を含め、章によっては原稿の加筆修正を行った。しかし、今回の抗議デモが研究会の終了後に発生したことを鑑み、その詳細な分析などは今後の研究課題として取り組んでいきたいと考えている。

本書は編者によるまえがき、序章、終章、および、六つの章(執筆者:敬称略)から構成されている。各章の順序は、政治の民主化、経済の安定化、社会の格差是正、世界でのプレゼンス増大、グローバル化への対応という連

続性を持った近年のブラジルの変化を念頭に入れたものであり、第一章「民主化と現在進行形の政治改革」(堀坂浩太郎)、第二章「ブラジル経済の新しい秩序と進歩」(浜口伸明・河合沙織)、第三章「環境変化に応じた新たな関係を模索する企業の三脚構造」(二宮康史)、第四章「社会保障における普遍主義の整備と選別主義の試み」(近田亮平)、第五章「外交におけるグローバル・プレーヤーへの道」(子安昭子)、第六章「開発と持続可能性」(小池洋二)となっている。

本書の目的は、二一世紀の初頭、再び世界での影響力を増したブラジルについて、その発展の特徴と「新しさ」を総合的に理解することである。その際、「新しいブラジル」に関する先行研究の主な論点を踏まえたうえで、本書では制度の整備、変容プロセスの連続性、グローバル化した世界へ向けた方向性などに注目した。また、各対象分野に関する変化の転換点や転換期を提示することで、ブラジルの「新しさ」の解明や変容の解説を試みた。ブラジルは、本年のサッカーのワールドカップや二〇一六年の夏季オリンピックの開催を控え、今後も注目度が国内外で高まると考えられる。本書が、このようなブラジルに対する理解を深めるための一助となることを願っている。

(こんた りょうへい/アジア経済研究所 ラテンアメリカ研究グループ)